嘉永４年の立山採薬で山本渓山が作製した腊葉について

吉野　俊哉

はじめに

京都の本草漢学塾山本読書室（以下、読書室）の当主であった山本渓山（文政10年〈1827〉～ 明治36年〈1903〉、字は章夫、のち渓愚と号する。以下、渓山）は、嘉永４年（1851）４月から９月まで164日をかけて京都から能登、高岡を経て立山までを往復する採薬旅行を行った。その目的には、祖父山本封山の生まれた越中高岡[1]を訪ねかつて読書室で学んだ門人や知己らと交流するとともに、道中での採薬もあった。この旅の詳細は、自ら道中での見聞や行動を記した『入越日記』[2]（以下、『日記』）に詳しい。

筆者はこれまで、享保年間に越中・立山を訪れた幕府採薬使による採薬の実態を、現地に残された廻状など地方文書の解読を通して明らかにしてきた。しかし、越中で近世本草学展開を知る視点としてはそれだけでなく小野蘭山（以下、蘭山）、畔田翠山（以下、翠山）、渓山といった、産物の開発や産業の振興を使命としない立場で立山を訪れた本草家の実態、採薬の記録を具体的に明らかにする必要を感じてきた。

この内、蘭山については立山での具体的な採薬の記録は残されておらず、後年（天明８年〈1788〉、60歳時）になって『衆芳軒随筆』に鵜鳥について記述した中で、白山と立山の来訪を指すと見られる「余嘗テ白立ノ両岳ニ遊シ」と書かれているに過ぎない[3]。また翠山についても、文政５年（1822）に北陸を訪れた際、白山の後に立山へ登ったと思われるが、立山山中での具体的な行程の記録は不明である。

それに比べ渓山は、『日記』から採薬以外の具体的な行動がわかるだけでなく、遠路越中を訪れ、高岡から足を延ばして敢えて立山へ登るに至った思い入れを感じさせる点が三つ見えてきた。

一つは、立山に登り観察、採集した植物を『日記』の中にまとめて「立山所得草木併録于此」と項立てし、その具体的な採集地を併せて記載している点である。同書には、北陸道の道すがら観察した植物を随所で書き留めているが、採集地を限定して集約した記述は立山のものだけであり、立山への関心の高さや採薬結果を詳細に書き残す意思が読み取れるようである。

もう一つは、渓山が幕末から明治にかけて動植物や鉱物を描いた1300枚を越える膨大な写生画の中に、折帖に仕立てた『本草動植物写生図譜』（41冊）が残されて[4]おり、その内『花卉三』の帖では冒頭に「立山採薬二十四品」と題し、立山で採集の高山植物を中心に31点の写生画をまとめて収めている点である。

この二つは、何れも立山山域での植生のまとまりを意識したもののようで大変興味深い。

そしてもう一つが、渓山は立山で採集した植物の腊葉を作製し、これもまとめて保存していた点である。

これまで、読書室に限らず物産会に出品された植物が鉢植えなどの生花だったのか、あるいは腊葉などで供されていたのか、出品目録からでは違いが分からず疑問に感じてきたことであった。それらが読書室で開かれた物産会では度々出品されていたことは後述するが、これは腊葉の出品が確認できる資料的な価値がある。

この腊葉の存在[5]は、平成23年（2011）から読書室土蔵内資料の調査と整理をされた松田清氏が作成し現在ウェブ上で公開する『山本読書室資料仮目録－統合電子版－』[6]（以下、「仮目録」）にも載せられている。具体的には『依蘭苔／立山所採／渓愚識』、『コホルタケ／立山所手採』、『嘉永辛亥七月越中立山採薬之日所得葉腊三十品／山本章夫蔵 立山採薬葉腊目録（２枚）入』[7]（資料名は「仮目録」に拠る。以下、これらの総称として「立山関連腊葉」）等の資料である。

この「仮目録」を見ると、この他にも読書室では各地に産する植物、鉱物、貝類などの標本を多数所蔵していたことがわかる。ただその中で「立山関連腊葉」のように限定した採集地域を記載して腊葉を整理保存して

いる例は他にないようで、ここからも敢えて立山で入手したことに特別な思いを持っていたように思われる。

そしてこれらは、当時の西洋植物学で資料とする腊葉標本の影響を窺わせるだけではなく、読書室や渓山と越中・立山との結び付き、更に幕末期における高山植物の認識や当時の名称、立山での地域的な植物相を知る上でも大変に貴重な資料と考えられる。

現在、これらを含む膨大な読書室資料は京都府立京都学・歴彩館に寄託され再整理が進められているが、今回関係者の承諾と許可を得て「立山関連腊葉」の熟覧調査を行うことができた。

小論の主目的は、この調査結果の概要を紹介し、近世本草学の中でそれらを位置付けることだが、その前提として先ず本草家による採薬と採薬記録の作成の流れとともに幕末期の本草家による腊葉作製の実態や、そこに見える知識や人的な交流を整理する。

それを踏まえて、『日記』、『本草動植物写生図譜　花卉三』（以下、『写生図譜』）[8]等に含まれる越中・立山に関連する部分と今回調査した「立山関連腊葉」を照合し、その関連に考察を加えたい。併せて腊葉の同定を行うとともに熟覧した資料を写真で紹介し、立山山域での19世紀前半の植物相と当時の名称に関する資料としたい。

１．近世本草学での採薬

先ず近世の本草家による「採薬」の位置づけを整理しておきたい。

『大和本草』が刊行されて以降、中国伝来の『本草綱目』に依拠しつつも、自らを取りまく自然界への好奇心や天産物理解の必要から、本草家が各地の山野へ入り薬草を見分けることが多くなっていった。その時代背景には幕府の政策的な動きもあったが、特に紀州藩主時代から民生の実学としての本草学に関心が高かった徳川吉宗が将軍に就くと、阿部将翁、丹羽正伯、植村政勝や野呂元丈らの本草家を江戸へ集め、幕命による採薬使に任じて各地で大規模な採薬を行ったことは大きな意味を持つ。この採薬使の活動は、天産物の調査により各地の情報を中央へ集約するだけではなく、各地へ薬草についての精確な知識の伝播を意図した双方向性を持っていたことも評価される点だからである。

その権威や規模から、「採薬」活動の多くが幕命を前提に行われたような印象も受ける。しかし野外での観察とその記載を重視していた近世本草学の展開に照らせば、諸藩が領内で独自に未知の薬草の発見、良質な薬草を栽培し産物として財政改善をめざして行ったもの、同時期の園芸ブームで植物の品種改良や珍奇な鑑賞植物の需要に応えたプラントハンター的な花戸の働き、各地の本草家が野外で子弟とともに行った実習なども、広義では「採薬」であろう。専門的に細分化していないため、その内容は多様である。そして「採」とは採集だけでなく薬草の植生、真偽の鑑定、品質の吟味などを含み、「薬」は薬草に限定されず植物全般、更には天産物全体を指すと見なしてよいだろう。

このような調査は、薬草の見分け、採薬、本草修行などと様々な言い方もなされたが、その規模や回数だけではなく、その多くでは調査した植物名などの記録（以下、本草学者が採薬に際して作成した記録を総称して「採薬記」という）が作成されていた点は重要である。またオランダから西洋植物学の知識が伝来して、植物の自然分類が試みた本草書が作られたり、腊葉が作製されたりしたことも、やはりこの時代の本草学の実態を明らかにする上では重要なことである。

そこで、本章では近世本草学隆盛を特徴付ける「採薬記」や腊葉作製の意味について考えてみたい。

１－１　産地情報の重要性

江戸中期以降は、薬草とその名称や薬効といった薬草そのものの情報に加え、その品質とも関連する産地情報が注目されていったと考えられる。

その背景には、近世本草学の実学的な性格から、植物の形状を観察して分類する分析的な視点よりも、薬草

について国産の有無、良質な産地の特定といった具体的実用的な情報を重視していたことがあったと考えられる。

国内での産地情報は、生薬の薬理、処方の知識に加えて薬草の各地での異名や真贋の識別のために必要とされることから、薬種の品質と流通量に反映するものであったと考えられる。これは享保から元文にかけて幕府が進めた諸国産物調査の情報でも言えることであろう。

例えば近世以降に作られた本草書を時系列で概観すると、早くは『本草図解』（貞享２年〈1685〉）で薬草については複数の産地を挙げ優劣を弁じる記載がある[9]。そして『本草綱目』の記載だけに拘泥せず、日本産の本草について山野での採集を重視し、自らの観察と検証を基本として作られた『大和本草』（宝暦７年〈1709〉）ではその傾向の記述が進む。それはその後の本草家が植物を発見・採取を重視するとともに、薬草に限らず天産物全般へと対象を広げ、いわゆる「博物化」する端緒となった。更にこの流れは、各地に産する天産物を対象として百科全書的な知識を集積するとともに、産地情報や方言の収集、名称の同定へと広がり『本草綱目啓蒙』（小野蘭山述、享和３〈1803〉）に集大成する。

１－２　「採薬記」の作成

本草家が各地で行った採薬の成果は、自ら見分けた植生の実態を本草書の内容に反映させただけではなく、「採薬記」の作成にも見られる。「採薬記」には一定の書式はなく、採薬に訪れた土地の植物相のみならず旅程や民俗の見聞、方言なども記され、旅日記や備忘録の側面も併せ持つ地方の博物誌でもあった。地誌や民俗誌などが専門的に分化していないので、著者の興味関心によるバリエーションが見られる訳である。

その中で、採集した植物名を列挙している部分は採集地域の植物相を知るデータである。享保・宝暦の頃から幕末にかけて阿部将翁、植村政勝、丹羽正伯、蘭山、翠山、山本亡羊、西村広休、大窪昌章、水谷豊文、佐藤成裕らが各地で採薬を行って著した様々な種類の「採薬記」は近世における各地の植物相を知る貴重な資料になっている。このような記録に資料的な価値として、後年には詳細な情報を付加するために絵図や実物（腊葉）が必要とされていくのは自然なことであろう。

例えば、翠山が立山採薬の成果を記した『立山草木志』（文政５年）に添えられた18葉の墨絵のスケッチには立山で採集した植物の腊葉を元に描いたと見られるものが含まれる。翠山が採薬した植物を、地域ごとに木と草とに分けて分類した腊葉帖を作製していたことは後述する。

１－３　腊葉の作製

日本では、近世以降も採集した植物を腊葉標本にして保存観察する発想は希薄で、オランダ船が持ち込んだ標本になった腊葉に倣う形で作られるようになったと考えられる。

しかし本草学が隆盛する中でも、日本で腊葉標本の作製が普及しなかったことには二つの理由が考えられる。

一つは、植物学での「標本」の価値とは観察や分類のためのデータであり、採薬が植物の形状分析や分類を目的とするものでなければ、そもそもその必要性が感じられなかっただろうと思われる点である。

ヨーロッパで腊葉作製の発達する背景が、地理的、気候的に植物相が貧弱なヨーロッパで世界各地から植物を入手する手段、遠くアジアやアフリカなどから研究資料となる貴重な植物を運ぶ手段の一つだった。[10]それに対して、日本は気候に恵まれ植物相が豊かなことで多種の植物を栽培し観賞することが可能だったため、そこから品種改良で変種を作り出したり盆栽を作ったりすることが重視され、乾燥させた草木を資料として活用する意識は希薄だったのではないかと思われるからである。

もう一つは、実学である本草学にとって、採集した植物の価値はまず「生薬としての利用」であったため、乾燥させて保存する必要があるのは植物全体ではなく薬効部位であったこと。しかもそれは実用のためであり、保存観察のためではなかった実態に照らせば、西洋植物学と同様に植物全体の形状を保ち資料として保存するような、腊葉を利用する発想は生まれにくかったのではないかと思われるからである。

これらの点から、本草家が腊葉を作製するようになるのは、本草学の博物化に伴い生花では入手困難な多種の植物への関心が高まりに加え、西洋植物学の影響を受けて以降のことと思われる。

このように植物を腊葉にして研究資料とする発想が本草学にないとするならば、各地の本草家たちが日常的に資料として腊葉を作製していたとは考えにくい。管見する当時の腊葉を見る限りは、当時の腊葉製作は、実証的な採薬を重視するとともに西洋植物学の知識を吸収していった本草家たちとの関係の中で継承されていったものと推定される。

この推定の上に立って、現存する幕末期の腊葉を挙げてみると、そこには蘭山の門人あるいはその孫弟子といった蘭山と学問的なつながりがある者たちや日本滞在中のシーボルト（Philipp Franz von Siebold〈1796～1866〉）と密接な関係を持った本草家たちの存在が見えるようである。

特に蘭山は、近世本草学の成果を代表する『本草綱目啓蒙』を述し、本草学の博物誌化に大きく関わるだけではなく『花彙』（宝暦９年〈1759〉）を著したように、植物に対する観察の眼には西洋植物学に造詣の深さが見られる本草家である。蘭山自身は年代的にシーボルトと会うことはできなかったが生前に製作していた腊葉には、門人たちによってシーボルトに渡されたものがある。シーボルト来日以前からも蘭山やその門人らの間では、自身が採薬で得た植物の保存や地方在住の門人から実物情報の入手手段としても腊葉を作製して研究に役立てていたことが見えてくる。

１－３－１　現存する腊葉

今回筆者が、実物あるいは写真、ウェブ上で公開された画像などから現存を確認できた腊葉は６件[11]ある。何れも細く切った紙片で台紙や包み紙に固定し、その名称を書き込んだものであった。全草ではなく部分のみを分割して作製したものも見られるが、薬草として保存するだけではなく西洋の腊葉標本を模倣し個体を保存することを意識して作製されたもののようである。但し植物名の他に台紙ごとに採取地や採集者、日時などの付帯したデータを記したものはなく、またスペースがあれば一枚の台紙に複数の植物を貼り付けてあるものも少なくない。

以下、年代順に挙げ、特徴を抄出し作製の背景を特記する。

（１）村松蔵書「腊葉帖」（石川県立図書館蔵）

作製した村松標左衛門は宝暦12年（1762）生まれ。能登羽咋郡の豪農で、加賀藩産物方植物主付となる。作製年は不明で寛政～天保の頃と推定され、腊葉は「山草」「蔓草」「灌木」などに分けて22冊の帖冊にまとめられている。

村松標左衛門は蘭山の門人で、能登に住みながら資料や腊葉を箱に入れて蘭山に送り教えを受けていたことが、蘭山から標左衛門へ宛てた書簡に見える[12]。例えば寛政12年（1800）十二月初二付のものには「押葉一本品物一曲等被遣一覧之上加書及返呈候」とある。ここにある「押葉」が、この「腊葉帖」に現存するものと一致するかは今後の調査が必要だが、少なくとも寛政年間から研究のために腊葉を日常的に作り、それを師の蘭山に送り鑑定を依頼し、蘭山はそれに朱を入れて返送する形で指導をする学問的なつながりが背景にあることがわかる[13]。

そのような指導は一度ではなく、享和３年（1803）二月付書簡にも「先達而より御預り置申候内、大箱壱ツ此度御返し申候」とある。ただ返送に当たって、同年二月十五日付書簡には「此度押葉等一箱遣書加御返し申候、御収入可被成候。其内葉不全あるいは節葉のみにて花なく難弁之品は書加不申候。」とあるような、標左衛門の腊葉の作り方に不備を指摘する内容も含まれるのは蘭山が植物の同定のために全体を腊葉にする、西洋植物学の標本を理解していたと証左と言えるだろう。

（２）「文化十年製／磔川官園薬草腊葉」（国立国会図書館白井文庫蔵）

この腊葉を旧蔵した白井光太郎による書き込み[14]（明治36年購入時）によれば、この資料は文化10年（1813）に「長塩某」が作製した腊葉とあるが、この人物についての詳細は不明である。主として幕府小石川薬園で採集した草木の腊葉を収載するもので、作製年がわかり現存する腊葉としては古いものとある。

この腊葉をめぐる蘭山とのつながりは確認できない。蘭山が幕府医学館に出仕し江戸へ居を移した寛政11年（1799）以降の製作であることから、蘭山あるいは蘭山門下の奥医師や幕府薬園関係者たちとの関連も想像できるが、この点は詳しい調査が必要である。

（３）シーボルトコレクション（東京都立大学牧野標本館蔵）の内「日本人作製の腊葉標本」[15]

シーボルトは日本のフローラ研究のために本草、博物学に関心の高い医者層と接する中で各地の植物を腊葉標本にして集め、1829年には12000点余りの腊葉をヨーロッパに持ち帰っていった。それを前提として腊葉についての知識を伝授していたようである。

この資料は、シーボルトがそのようにしてヨーロッパへ持ち帰っていた標本の一部で、10名の日本人協力者が作製した標本が含まれる。その中で長崎在の関係者（中山作三郎、平井海蔵、茂伝之進、美馬順三）、及びシーボルトが植物採集に雇用した少年（熊吉）以外の本草家では蘭山の他に、伊藤圭介、水谷助六（豊文）、大河内存真、桂川甫賢の名前が見える。

蘭山本人に加えて、これらは何れも蘭山と学問的な関係を持つとともに、桂川甫賢を除く３人は尾張の博物学サークル「嘗百社」の中心となった人物でもあることから、蘭山を中心とした人的つながりは、近世本草学の中でも腊葉作製とその利用を重視する学統だったように思われる。

特に尾張の嘗百社社中の中心となった３人の本草家は特に西洋植物学を吸収しシーボルトと会って腊葉を贈るなど、深いつながりがあったことが注目される。

① 小野蘭山作製 15枚[16]

和紙片を撚って付けた札に名称の墨書が残っているものも含まれる。この札は蘭山自身か、あるいは弟子たちがシーボルトに贈る際に付けたものと見られる。和紙を三折にした中に腊葉を挟み込んでその上下を折り曲げ、表面に植物名を墨書した形状で保存されている。この形式は後述する渓山が製作したものと同様で、これが腊葉を綴じて帖冊にする手法と共に、当時よく用いられた腊葉の保存形態だったようである。

② 伊藤圭介作製 27枚

伊藤圭介がシーボルトに贈った腊葉標本の目録『シーボルトへ所贈腊葉目録』（国立国会図書館蔵）は現存しており、その中には草部と木部に分けて和名のイロハ順に272の植物名が記されている。伊藤は嘗百社の主要メンバーで、水谷豊文に本草学を学んでいる。また水谷豊文と大河内存真はとともに文政９年（1826）に尾張でシーボルトに会い、そこで腊葉帖14冊を贈っている。伊藤の弟子には賀来飛霞がいる。

③ 水谷豊文作製 119枚

水谷豊文は嘗百社の主要メンバーであった。小野蘭山に入門して本草学を学んでおり、読書室の山本亡羊とは同門の兄弟弟子になる。文政９年にシーボルトに会った際に腊葉を贈っている。

④ 大河内存真作製 65枚

大河内存真は嘗百社を創設した本草家で、水谷豊文に本草学を学ぶ。文政９年にシーボルトに会い腊葉を贈っている。

④ 桂川甫賢作製 ９枚

桂川甫賢は大槻玄沢、坪井信道らに蘭学を学び、文政10年（1827）幕府奥医師となる。嘗百社や蘭山とは直接のつながりは見られないがシーボルトと交流があり、文政９年に江戸で津山藩の藩医であった宇田川榕菴とともにシーボルトを訪ね、腊葉を贈り教示を受けている。

（4）畔田翠山「腊葉帖」（大阪市立自然史博物館蔵）

翠山は、蘭山の門人だった紀州藩医小原桃祠に本草学を学んでおり、学統からは蘭山の孫弟子になる。野外での採薬を重視した点は蘭山の考え方を承けたものと思われる。

翠山のものは腊葉を短い紙片で固定するのではなく、台紙になる和紙の上に５㎜ほどに細く帯状に切った紙を同じ長さに何本も平行に貼り全体を留めて固定している点が特徴的で、他とはやや異なった体裁である。それらを製本した腊葉帖は、採薬に訪れた地域ごとに分類して作られたもの69冊が現存[17]する。

文政５年に白山と立山での採薬を行った際に採集した植物の腊葉帖もあり、その時の採薬記録『白山草木志』、『立山草木志』はそれに基づいている。前述のように『立山草木志』には18葉の図が載せられているが、その内16葉は腊葉とも一致する[18]。ここに見られる「採集地域ごと」という分類は、後述する渓山が立山で採集した腊葉の保存の際にも見られるものである。

（5）「賀来飛霞標本」（宮崎県立総合博物館蔵）

賀来飛霞は、延岡藩領内での採薬記録『高千穂採薬記』（弘化２年〈1845〉）を著しており、この資料はその元になった腊葉である。当初地元延岡で、洋学に通じた帆足万里から本草学を学び、のち京都へ出て天保５年（1834）には読書室に入門し山本亡羊から本草学を学んでおり、学統としては蘭山からは孫弟子になる。

（6）山本渓山「立山関連腊葉」（京都府立京都学・歴彩館寄託）

この資料についての詳細は今回の調査内容として後述する。渓山の父亡羊は蘭山に本草学を学んでおり、亡羊を介して渓山も蘭山の孫弟子と考えれば、やはり蘭山の学統を継ぐと見ることができるだろう。

ここで、近世の本草家と腊葉の作製について小括する。

近世には腊葉標本を用いて植物の構造を分析したり体系的に分類したりする発想は、本草学の延長線上にはなかった。一方、植物を腊葉にして保存する手法は洋学との接触で画期となったシーボルトの来日後から作られ始めたものでもなく、恐らく蘭書を通して西洋植物学の知識が伝来し、舶来した西洋の腊葉、乾燥標本などに倣う形で、薬品会や物産会での公開が主目的だったものを含めて、実物を固定して保存するために作られるようになっていったものと考えられる。同時代の西洋で作られた学術標本と近似しているが、日本ではそれを資料とした植物の構造の理解や、体系的な分類への活用は普及しなかった。

そうした中で、山野での採薬を踏まえた観察を非常に重視し、西洋の植物学を受容していった宇田川榕菴、飯沼慾斎らに受け継がれていった小野蘭山を中心とした学統[19]では、腊葉の作製や利用は比較的早くから行われていたようである。また蘭学の影響を比較的強く受けていた尾張の嘗百社社中の本草家たちは、西洋の植物学について知識吸収に積極的で、江戸や熱田でシーボルトと出会う機会を持ち、教示を受けるとともに腊葉標本を贈るなど、その価値を理解すると共に作製に慣れていたようである。この点は、本草学研究サークルとしてよく比較される江戸の「赭鞭会」の活動とは違う一面である。

そして年代的に、日本での腊葉作製が寛政～文化年間頃から本草家の間で始まっていたとすれば、それは採薬の必要性を強く教え[20]、結果として西洋植物学を受容する素地ともなった、採薬による実物の観察を重視してきた蘭山の学統によって広まった部分が大きかったのではないかと考えられる。蘭山は江戸出府後にも毎年のように幕命で採薬に出かけ植生を記録した採薬記を作成して[21]おり、フィールドワークを重視する学統は江戸の本草学にも影響を与えた可能性が考えられる。また尾張では水谷豊文、京都では山本亡羊等へ受け継がれており、両者には物産会を通しての交流も見られる[22]。蘭山の学統は次の世代になる伊藤圭介、加来飛霞らへ、そして読書室の中では亡羊から子の渓山へと受け継がれていったと考える。

１－３－２　腊葉作製の意味

幕末期、シーボルトが日本国内の植物を腊葉標本にして収集した影響もあり、日本で腊葉が作製される機会は多くなっていったものと思われるが、その広がりは、必ずしも西洋の植物学の普及とは比例しなかったようである。

本来、腊葉標本は植物の分類、植生、植物の構造などを実証的に研究するための資料に用いられてきたものであるが、前述のように近世の本草学の現状ではその意識が希薄で、腊葉の作製事例が増えれば植物学が深く根付いていくとも言い難い。近世本草学では天産物の観察と記載が進むが、その内容を保証する証拠を残す姿勢の欠如、また採薬によって新たに発見された植物に対するプライオリティが重んじられなかったことが指摘される[23]からである。ここに近世本草学と近代植物学の違いが感じられる。

むしろそれとは別に、日本での腊葉作製の背景には薬品会や物産会の隆盛があったと思われる。それらの会で珍しい植物を腊葉にして出品することで、実物を元に天産物の価値を吟味する欲求の高まりがあったと考えられるからである。加えて物産会の開催ごとに出品目録を作成していたことや、幕末には「珍しいものを求める見世物」の要素が大きくなったことも、生花で出品できない植物を腊葉にする動機の一因にあったと見る。物産会は、出品を元に議論をするセミナーとしての役割も持っていたが、珍しい植物を実物で見る機会なっていった役割も大きかった。

そう考えれば、日本での腊葉の作製は西洋植物学の合理的な思想や研究手法よりも技術面が重要視され、野外での調査や観察での補助的な実物の固定法として広がったと見ることができるだろう。

２．読書室と越中・立山の植物

２－１　渓山の立山登山

渓山は４月１日に京都を出発し、福井、吉崎を経て大聖寺、金沢へ到る。のち高岡では祖父封山の生家日下家に滞在し、津島北渓の勧めでそこから能登での採薬（６月７日～７月15日）へも出かけている。

立山へは高峯元稑を同行して７月20日に高岡を出発し、22日～27日には立山山中で採薬を行っており、『日記』では、立山で得た草木40種の記録が立山から下山し高岡の日下家に帰った28日の記述の後に記されている。

23日に芦峅寺に来てから27日に岩峅寺、大場村を経て富山城下へ帰るまで採薬に関連する記述は多くはないが、それでもいくつかの場所で採集した植物名の記された部分が見られる。（植物名下線は筆者）

二十三日　泉村漸多異草 得猿猴草（中略）得 紅花　蛍袋　甘遂　山蓼　木本鉤吻　般之木　斑葉鶏腿児

二十四日　至弥陀原 為曠野路稍坦平 奇花異草極多　豆菜　珍車　満地皆是

二十五日　三山所産大抵皆小草樹　止五鬚松而尽皆蜿蜒貼地

『日記』を見ると、立山山中では天候には恵まれず難所に阻まれたり泥濘に足を取られたり爪を剥がしたりする、若い渓山にとってはかなり険しい旅だったようである[24]。下山の際に「余不能無怍 雖奇卉満眼無暇采摘」と心情を吐露しているところなどは、立山では旅程中どこよりも植物に関心を寄せて調査を行いつつも、珍しい花々を目にしながら、十分な採薬ができなかったことを恥じる実直な記述であろう。

下線の植物のうち、「豆菜」と「珍車」は、後で採集植物をまとめて記録した部分と重複しており、また腊葉も残っている。立山山域で採集した植物は、これらも含めると合計49種が挙げられる（**表１「「立山関連腊葉」『日記』『写生図譜』関係一覧」（１）**参照）が、まとめて記された植物では弥陀ヶ原より低い場所で見分したものが除かれているようである。この点から渓山は、立山の山域を弥陀ヶ原より高所と考えていたと思われるが、その意図はこの『日記』の記述からは読み切れない。但しこの『日記』の草稿の存在がわかっている[25]ので、その校合による検証を俟ちたい。

２－２　読書室の物産会などに出品された、立山関連の植物

渓山は、兄榕室が父亡羊の後を継ぐと、安政５年（1858）に分家して屋号を「海紅亭」と付け、儒医と絵画を生業とした[26]。幕末から明治維新期の激動の中で、本草学の伝統を継承発展させるべく様々な動きも見せ、海紅亭では読書室物産会に比べて小規模なものであったが、文久元年（1861）８月から毎月海紅亭物産会を開いていた。その内特に同年９月開催の第２回には「立山葉腊」が出品されていたようである。今後具体的な品目については調査が必要[27]だが、明治以降に日本で近代植物学が確立する以前の腊葉の扱われ方がわかる事例である。

この海紅亭物産会は僅か３年で終了したがその後は本草研究会「聚芳社」を立ち上げ、そこでも毎月本草会を開催していた。そのうち明治20年（1887）３月に開かれた第14回の出品目録にも「立山采薬葉腊」の記載があり[28]、今後その具体的な内容の調査も必要である。

３.「立山関連腊葉」

今回調査した「立山関連腊葉」は、前述の通り（１）『依蘭苔／立山所採 渓愚識』、（２）『コホルタケ／立山所手採』、（３）『嘉永辛亥七月越中立山採薬之日所得葉腊三十品／山本章夫蔵 立山採薬葉腊目録（２枚）入』の３件である。一点ずつ保存状態や形状を熟覧し、法量を測定し、記録写真を撮影した。寸法は**表１**の「腊葉包寸法」欄に示した。本章では『写生図譜』の写生画、『日記』の関係部分と照合しながら腊葉の製作や写生画が描かれた背景などを考察する。

（１）『依蘭苔／立山所採 渓愚識』

『日記』には「衛須蘭土勢茂須[29]」、採集地は浄土山と記されている。箱に整理された31点の腊葉とは別置して保存されていたものである。和紙を三つ折りにして包み、表に「立山所手採／依蘭苔／渓愚識」とある。腊葉にした際に名称は和名の「依蘭苔」に改めたことがわかる。

また署名には渓愚の号を用いていることから、渓山から号を改めた後明治以降の製作と思われる。嘉永四年に立山で採薬した後時間を経て、恐らく箱入りの腊葉と同時期に整理されたものであろう。箱入りのものに比べるとやや虫損が多く見られる。

（２）『コホルタケ／立山所手採』

『日記』には「凍蕈」、採集地浄土山とあるもので、これも箱に整理された 31 点とは別置されている。包みの表には「立山所採／コホルタケ／即樹衣一種」とあるが、これまで「コホルタケ」という名称が他の本草書などでは見当たらず、名称からの同定は不可能であったが、この腊葉からは「ミヤマハナゴケ」に同定できた。「樹衣」とは樹状地衣類の意であろう。整理の経緯は（１）と同様と考えられる。

（３）『嘉永辛亥七月越中立山採薬之日所得葉腊三十品／山本章夫蔵 立山採薬葉腊目録（２枚）入』

個々に和紙に包まれた腊葉が、厚さ約５㎜の杉板製小箱（縦 23.8㎝×横 16㎝×深 3㎝）にまとめて保管されている。蓋の表には「嘉永辛亥七月越中／立山採薬之日所得／葉腊三十品　山本章夫蔵」と墨書した紙（縦 16.8㎝×横 8.5㎝）が貼付されている。また平積みにした際にも外側からわかるように、箱手前側面には「品薬采山立」と墨書した紙が貼付されている（写真２）。また、現状では剥がれているが、箱の右側の５箇所に和紙で側面と蓋を糊付けして蝶番状にし、蓋を片開きで開閉できるように細工した特徴的な跡がある。これらの腊葉は秘蔵されたものではなく、機会があると取り出して利用されていた時期があったのではないかと思われる。

①　付属品

箱の中には罫紙（縦 23.7㎝×横 6.8㎝）２枚に毛筆で腊葉の名称を記した「立山採薬葉腊目録」が添付されている。名称は腊葉の包み表面に書かれた名称に概ね一致するが、包みには書かれていた「立山」の文字

と「添え書」の部分は省かれている。目録の記載順と現存の重ね順が違うのは、後に出し入れがあり入れ替わったためであろう。

箱の表には「立山採薬之日所得／葉腊三十品」とあるが、この目録の最後には

壹（朱印）（訂正印）　（最カ）
計参拾弐枚／此所ノ分ハ尤モ有名ナルモノ也」

と記されている。「尤モ」は「最も」の意と解釈すると、箱に収納した分の他に所蔵する腊葉があった中から選んだことも窺わせる内容である。

そして、ここで問題になるのは箱の表には「三十品」と記されているのに対して、この目録では腊葉の枚数を一旦「参拾弐」とした上で更に見せ消ちで「参拾壹」とし、訂正印が押してある点である。箱の中に収められた腊葉の包みは全部で31包あるので、本来なら31点と数えることができる。この点は、実数と目録の記載は一致する。しかし「ハリブキ」と「チングルマ」はそれぞれ２包ずつあるので、採集された植物の種類としては29種と数えることも可能ではある。それにも拘わらず、箱の表には29品ではなく30品とある点が疑問だが、恐らくこの差異は、写生画制作や腊葉の再整理との関連によると考えられる。

腊葉とそれを元に描かれた写生画を照合すると、「ハリブキ」の名称を付けて保存されている２点の腊葉が異種であり、この点は写生画でも「ハリブキ」をトゲのある種とトゲのない種（メハリブキ）の２種としてそれぞれ別々に２枚描いていることがわかる。それに対して「チングルマ」の写生画は、２包みあるうち一方の包みにあった腊葉のみを描いたものだったことがわかる。つまり、腊葉を写生した際に「ハリブキ」は異種として２品、「チングルマ」は同種として１品と数えたと見られる。そのため箱に整理した際には総数を「三十品」と数えたものと思われる。そうだとすると、現存の形で箱に整理されたのは「チングルマ」を同種と見なして写生画が描かれた後、そして目録は後年に腊葉の実数をチェックして作られたものと推定される。

②　腊葉の保存状態

箱の中の腊葉は、すべて和紙を三折りにした中に挟んで包み、上下を折り曲げてあるが、腊葉は要所に小さな紙片を糊付けして包み紙に固定し、表面になる部分に植物名を墨書して保存されている。このやり方はシーボルトコレクションの中にある蘭山が作製した腊葉にも見られるものである。

破砕して粉末状になっている部分が僅かに見られるとはいえ腊葉自体は、ほとんどが細い部分も残っており、包みの折れ目部分に若干の虫損は見られるが、概ね保存状態は良好である。

③　作製年代の推定

前述のように「立山関連腊葉」が明治20年の聚芳社本草会でも出品されていたとして、その整理と『写生図譜』の制作を幕末から明治20年代までの時間軸の中で整理してみると、以下のようになる。

■～嘉永４年（渓山の立山登山以前）

読書室には様々な標本類を資料として所蔵

嘉永４年以前から亡羊の時代や、渓山が自ら各地で採薬して入手した標本類、その他にも読書室で開いた物産会や、他の本草家との交流を通して入手したと考えられる様々な標本資料が代々所蔵されており、それらも京都府立京都学・歴彩館寄託の読書室資料の中に多数見られる。入手経路について特定はできていないが、そのように収蔵された中には、渓山が自身で採集したものとは別の形で越中と関わりを持つ植物、鉱物などの資料があると思われる[30]。

■嘉永４年、渓山の立山登山

渓山が立山で採集した品を腊葉にして保存

立山登山を行い、植物の採集を行う。植物名は『日記』に記載がある。但し、清書の際に書き落とし、または割愛されたものがあった可能性もあることは後述する。

採薬時から、腊葉にすることを前提に書籍の頁間などに挟んで保存し、帰京後には速やかに腊葉を作製したものと思われるものである。

■嘉永４年～安政２年読書室物産会・文久２年 海紅亭物産会に出品

「三葉黄連」、「白根人参」、「矮生玫瑰」、「立山フグリ」、「細葉岩松」などが、読書室所蔵からの出品として目録に記されている。但し、「三葉黄連」以外は『日記』には記載がない。『写生図譜』には「矮生玫瑰」、「立山フグリ」、「細葉岩松」の写生画があるが、これらは立山産ではあるが渓山の採集品ではないので「立山関連腊葉」には含まれていない。物産会で他の者が出品した品を写生したもので恐らく「立山関連腊葉」とは別の時期に描かれたものと思われる。

■安政２年前後～明治 20 年前後

渓山の『写生図譜』制作・腊葉を箱に整理して保存、聚芳社薬品会への出品

『写生図譜』に編まれた「立山採薬二十四品」と題された一連の写生画がいつ描かれたものか、明確な記録はない。渓山自身が立山で採薬したもの以外、物産会の出品、関係する本草家や花戸などから入手して描いたものも含まれており、その分析は後述する。但しこのうち渓山が採集したことがわかっている植物の写生画については、「立山関連腊葉」と形状がほぼ一致している。また前述の「チングルマ」の写生のように、腊葉は２包みに分けて保存してあったうち、一方だけを写生した場合もある[31]。

そして『写生図譜』の写生画31点には、「溪愚瀉」の署名が入り「山本章夫」の落款が押されたもの、落款だけのもの、署名も落款もないものの三種類が混在している。この特徴に注目して分類してみると、「立山関連腊葉」を描いたものでは、「未詳（Ａ）」を描いたものは落款のみ、「未詳（Ｄ）」と、「チングルマ・岩ギキヤウ」を描いたものには署名と落款があるが、それ以外の写生画には署名も落款もない。それに対して、渓山が採集した「立山関連腊葉」以外を描いたものには、すべて署名と落款が入っているという特徴が見られるが、この違いは、写生画が描かれた経緯や時期と関係があると思われる。

つまり「溪愚」とあるのは号を「渓山」から改めた後であるから、溪愚の署名と落款のないもの（９枚）は署名のあるものよりも早い時期、恐らく前述の安政２年の物産会より以前に、日常の写生活動の中で描かれていたものだった[32]と考えられる。

そうすると「立山採薬二十四品」と付けられた題も、折帖に仕立てて西村広休に譲渡する[33]ために『写生図譜』を制作した際に付けられたものの可能性もあろう。腊葉を作製してから比較的早い内に写生したものや、後から描いて溪愚の署名と落款を押したものや「立山関連腊葉」以外の写生画と合わせて折帖に仕立て、最終的に『花卉三』としたのではないかと見られる。

写生画に描かれた形状と「立山関連腊葉」の形を仔細に比較すると、向きが逆であったり重ねてあったりするなど、先に腊葉を固定したままでは描きにくかったと思われる事例もあり、腊葉を固定しそれをまとめて箱に入れ保存したのは写生を終えた後の作業だったと推定される。

そして前述のように、箱の側面には「品薬采山立」と記されている（写真２）ことと、聚芳社本草会の目録でも「採薬」とせずに「采薬」と記していることに時期的な共通性があるとすれば、渓山が「立山関連腊葉」から選んで明治以降にも聚芳社薬品会で出品していた可能性が高い。

ここで、「立山関連腊葉」について、採集から腊葉製作とその整理、写生画の制作の関連を小括して時系列に番号を振ると、以下のような経緯が推定される。

①嘉永４年に立山へ登り採薬、採集植物を持ち帰る
②腊葉を作製（当初は未整理、固定せず仮整理のまま保管か）
②′『日記』を執筆・清書
③腊葉を読書室所蔵品として物産会などに出品か
③′日常的に写生画を描く中で、それらの腊葉を写生
④『写生図譜』の製作時に「立山採薬二十四品」と題して、一連の「立山関連腊葉」以外の写生画とともに（渓愚の署名と落款のあるもの）折帖に仕立てた（「花卉三」の帖）
⑤写生後に「立山関連腊葉」を現存の形で包み紙に固定、整理して箱にまとめて保管
⑥聚芳社薬品会（明治20年）等の明治以降の展覧会などにも出品か？
→以後土蔵内で保管
（※②と②′、③と③′は同時期に平行して行われたものと思われるが前後関係は曖昧）

３．「立山関連腊葉」と『写生図譜』、『日記』内容の相関関係

「立山関連腊葉」、『写生図譜』、『日記』それぞれの記載内容の相関関係を考察する。**表１「「立山関連腊葉」『写生図譜』『日記』関係一覧」、表２「相関関係の内訳」、図１「相関関係図」**参照。以下【該当資料】に引用した資料の名称は、「立山関連腊葉」にあるものはその名称で記入したが、そこに存在しない場合は『写生図譜』、『日記』の順でその名称を記入した。

３－１　「立山関連腊葉」の『写生図譜』、『日記』での記載

（１）『写生図譜』、『日記』、「立山関連腊葉」の全てに存在するもの（相関関係図のＢ項）

16種18点確認できる。『日記』に記載されており『写生図譜』に写生画がある植物が「立山関連腊葉」を元に写生したことは、その形状がほとんど一致していることから明らかである。（写真参照）

【該当資料】

「立山ヲンノレノ木」、「立山覆盆子ノ類」、「立山三葉黄連」、「立山五葉イチゴ」、「立山マメナ」、「立山ハリブキ」、「立山ハリブキ」（２点）、「立山モミヂカラマツ」、「立山マナギサウ」、「立山チングルマ」（２点）、「立山ツガマツ」、「立山ツガマツ一種」、「立山未詳（Ｄ）」、「御前タチバナ」、「立山岩キンバイ」、「立山金梅サウ」

（２）「立山関連腊葉」と『日記』の双方に存在せず、『写生図譜』にのみ存在するもの（相関関係図のＣ項）

８点確認できる。『写生図譜』には実際に渓山が立山で採集した植物以外も相当数（約25％）が含まれていることがわかる。それらは、前述のように幕末から明治初期にかけて読書室が関係する物産会、薬草会などの機会に写生したり、読書室と交流があった各地の本草家、あるいは花戸らからの出品で入手されたものを写生したりして描かれたものと考えられる[34]。但し、写生画を元にした植物同定では、立山山域に産しない植物が含まれている可能性も否定できず、折帖が製作された時点で立山関連以外の写生画も混入したと見られる。

【該当資料】

「紺レン」、「立山玫瑰」、「御前タチバナ」、「カモメラン」、「立山フグリ」、「ルリハコベ」、「立山産／胡黄連ト云者／即狐ノ尾一種」、「立山産／細葉 石松」、「釵子股」

（３）「立山関連腊葉」と『写生図譜』の双方に存在するが、『日記』には存在しないもの（相関関係図のＤ項）

６点確認できる。立山産として写生し腊葉には、渓山が記録していなかった物もあったことが分かる。当初「題に立山採薬とある以上は、すべて写生画は渓山自身が採薬した腊葉を元にして描かれ、それは『日記』

の記載で確認できる植物ではないか」という前提を仮定していたが、必ずしもそうではなく、読書室には渓山が立山を訪れる以前から山本亡羊、榕室らが各地の採薬で収集したものや、それ以外の機会に入手した腊葉を元に描かれた画もあったことがわかる。

【該当資料】

「立山未詳（A）」、「立山ウサギギク」、「立山キクブキ」、「立山未詳（D）小木」、「立山未詳（C）」、「立山銀梅サウ」

（4）『写生図譜』、「立山関連腊葉」の双方に存在せず、『日記』のみに存在するもの（相関関係図のＥ項）

26点確認できる。『日記』に記載された植物は49点と多いが、そのうち半数以上（53％）は採集されなかったか、腊葉にされなかったことがわかる。立山山中で、『日記』にあったような危険な状況では、植物の確認ができても採集が不可能だった場合もあろう。あるいは、採集して持ち帰ったものの中でも、整理して箱に収められるまでに散逸、あるいは本草家との交流の中で譲ったものがあった可能性も考えられる。

【該当資料】

「鬼臼サンカヨウ（姥懐）」、「蛩休　キヌカサソウ（姥懐）」、「大葉石菖（弥陀ヶ原）」、「金光花（弥陀ヶ原）」、「菊款冬（二谷）」、「葱管黎蘆シユロサウ」、「蒜黎蘆バイケイサウ」、「唐松草（一谷）」、「白花地楡」、「白花龍膽（御前）」、「鹿子草　一名草下毛、二谷」、「粘魚鬚ヤマカシウ」、「雪笹」、「大雪笹」、「鬼燈檠」、「観音蓮ミヅバセウ」、「臼木一種」、「猿猴草」、「紅花」、「蛍袋」、「甘遂」、「山蓼」、「木本鉤吻」、「般之木」、「斑葉鶏腿児」、「五鬣松」

（5）『日記』、「立山関連腊葉」の双方に存在し、『写生図譜』には存在しないもの。（相関関係図のＦ項）

６点確認できる。立山で採集し持ち帰って腊葉が作られた中で、写生されなかった、あるいは写生しても『写生図譜』には入れられなかったものである。この中で「立山所手採依蘭苔」、「立山所手採コホルタケ」の２点は箱とは別に保存されているものである。

折帖を製作する際に何らかの理由で取捨選択がなされたものと見られる。『写生図譜』は純粋な博物誌料の記録として作られたというよりも西村広休へ譲渡するために製作されたという点を重視すれば、描かれた写生画では美的な形状や色彩が考慮された可能性はあろうが、明確な意図は不明である。ただ、写生された植物の形状を見たとき、全体としては「花が存在していない腊葉」を写生した図は多いが、この項に該当する植物のみを見ればすべて「花」が描かれている。逆に見ると「花」が付いている腊葉はすべて写生されている事実が見える。

【該当資料】

「立山タウチサウ」、「立山タケカンバ」、「立山舞鶴サウ」、「立山コケモゝ」、「立山所手採／依蘭苔」、「立山所手採／コホルタケ」

（6）『写生図譜』、『日記』の双方に存在せず、「立山関連腊葉」にのみ存在するもの（相関関係図のＧ項）

３点確認できる。後年、腊葉の再整理の際に他から入手した腊葉が箱に混在した可能性を全く否定はできないが、何らかの理由で『日記』を清書した際には書き落としたものがあったようであるが、詳細は不明である。

【該当資料】

「立山イチマツサウ」、「立山産ウツボグサ」、「立山細葉七カマド」

（7）「立山関連腊葉」と『写生図譜』の双方に存在するもの（相関関係図のＢ項＋Ｄ項）

23点確認できる。いずれも腊葉を元に描かれたものである。写生画33点中23点あり、『写生図譜』の約70％は渓山が自身で採集した腊葉を描いていたことがわかる。

【該当資料】

「立山ヲンノレノ木」、「立山覆盆子ノ類」、「立山未詳（A）」、「立山三葉黄連」、「立山五葉イチゴ」、「立山マメナ」、「立山ハ

リブキ」、「立山ハリブキ」、「立山モミヂカラマツ」、「立山ウサギギク」、「立山マナギサウ」、「立山白山ギキャウ」、「立山キクブキ」、「立山チングルマ（２種）」、「立山ツガマツ」、「チングルマ」、「立山ツガマツ一種」、「立山未詳小木（B）」、「立山未詳（C）」、「立山未詳（D）」、「立山岩キンバイ」、「立山銀梅サウ」、「立山金梅サウ」

（８）『日記』に記載がある内、実際に採集して持ち帰り、「立山関連腊葉」となったもの（相関関係図のＢ項＋Ｆ項）

24点確認できる。『日記』に記載される総数49点のうち約半数（49%）である。

【該当資料】

「立山ヲンノレノ木」、「立山タウチサウ」、「立山覆盆子ノ類」、「立山三葉黄連」、「立山五葉イチゴ」、「立山マメナ」、「立山ハリブキ」、「立山ハリブキ」、「立山モミヂカラマツ」、「立山マナギサウ」、「立山白山ギキャウ」、「立山タケカンバ」、「立山チングルマ」、「立山ツガマツ」、「立山ツガマツ一種」、「立山未詳（D）」、「御前タチバナ」、「立山岩キンバイ」、「立山舞鶴サウ」、「立山コケモゝ」、「立山金梅サウ」、「立山チングルマ」、「立山所手採依蘭苔」、「立山所手採コホルタケ」

３－２「立山関連腊葉」の同定結果

表１「立山関連腊葉」『写生図譜』『日記』関係一覧」（１）の同定植物名欄を参照。腊葉の同定は、日本海植物研究所長佐藤卓氏による。但し筆者が調査で撮影した資料写真を元にしたため、一部には細部の形状には解像度が不鮮明で、推定に拠らざると得なかった部分があったことを付記する。更に精確さを期すためには、可能であれば原本による同定が必要である。

３－３「立山関連腊葉」の資料的価値、調査の意義

腊葉を見る限り、渓山の立ち位置はあくまで本草学にあり、植物学の知識に基づいて分類することへは向かわなかったようである。保存されている腊葉は植物の名称のみ記されたものであり、採集日時や場所等のデータの記入がないものは、厳密には植物学的な標本の形態としては不十分であろう。この時代の本草学者にとって腊葉利用の目的は特徴的な部分を採取して実物を物産会に供し、自家塾の講義などでの提示が主だったと考えるのが妥当ではないかと思われる。

24歳の若い渓山の立山への興味は、深山幽谷の調査、平地では見られない珍しい草木への探究心にあったと思われるが、「本草家の立山への関心」という点では、渓山と同じく立山で採薬を行った翠山の事例との比較も必要だろう。そこで試みに、両者がそれぞれの採薬結果を記した『立山草木志』と『入越日記』で共通して記載している植物を照合すると、「立山チングルマ」、「立山ツガマツ」、「葱管黎蘆（シユロサウ）」、「蒜黎蘆（バイケイサウ）」、「粘魚鬚（ヤマカシウ）」、「立山未詳（C）」、「観音蓮（ミヅバセウ）」、「蛍袋」、「五鬣松」の９種が挙げられる[35]。また「峯針 一名恩能礼」、「立山未詳（C）」は両者ともに採集し、それぞれ腊葉が残っている[36]。もちろん登山時期や期間などの条件は異なるが、採薬の志向や視点にも違いがあったようで、共通するものは比較的少ないようである。

また、畔田翠山の腊葉にも同じことが言えるが、この時代、名称が全国的に共通するもの以外で色や形状から見た変種や亜種などについては、その土地で特徴的に見られる類似種の意で、採取地名を冠して、例えば「立山○○」、「白山△△」とするバリエーションの記載が見られる。これらは明治以降、それらの地方名が整理されて共通する和名が確定する過程がわかる資料でもある。また、近世の腊葉作製と保存方法、天産物への理解の深さ、自然観察の実態がわかる実物資料でもある。

そして本草学史的には、近世以降に本草学がどのように西洋の植物学と交流し、博物学に近づいていったか、その過程を知る手掛かりでもある。

おわりに

今回の「立山関連腊葉」調査には二つ意味があった。

一つは、渓山をキーマンとした読書室と越中・立山のつながりについて、様々な角度から示す史料である『入越日記』の記述を裏付け、その実態を調査すること。もう一つは、越中出身の山本封山に始まって明治中期までその伝統を継承し、京都本草学の中心だった読書室の活動を物語る資料として、近世本草学展開の中で、作製の背景を示すことであった。

この二つは、越中と近世本草学の関わりを具体的に明らかにする上では読書室との様々なつながりを明らかにすることが非常に重要であることも意味している。

今回の調査は、立山をめぐる読書室の活動との直接的なつながりを示すものであったが、「仮目録」を見ると膨大な読書室資料の中にはこの他にも越中との人的、物的な関係を明らかにする資料が多数含まれているようである。特に読書室と高岡に住む医者層とのつながりの深さでは、読書室への入門者が高岡を中心とした越中の西部地区出身者が多かった(37)ことが知られている。また、越中西部の医者層の本草学への関心を示す学習会「神農講」の活動では、天保年間以降に「産物展示」と称して物産会に類する活動が行われて、博物的な知識の交流を行っていたこともわかっている。これを含めて京や大坂で学んだ高岡の医者層が越中の学芸活動を引っ張っていた(38)ことからも、読書室の学統と越中での学芸活動展開の関係は想像以上に深いものがあるようである。

読書室資料はこれらに関する情報の宝庫であり、今後公開が俟たれるところである。

［謝　辞］

資料調査に際し、京都府立京都学・歴彩館より特別に閲覧、写真撮影のご便宜をお図りいただきました。閲覧及び画像掲載のご承諾に当たっては中井立美氏より格別のご理解ご配慮を賜り、諸手続には山本琢氏よりお力添えをいただきました。

また、読書室ご当主山本和彦氏からは、これまでも読書室関連の調査研究・企画展開催に際しご理解ご協力をいただいて参りました。

腊葉の同定及び立山の高山植物に関しては、佐藤卓氏（日本海植物研究所長）より専門的な立場から多くのご教示を頂きました。

お名前を挙げて深く感謝申し上げます。

［註］

（1）渓山の祖父山本封山は越中高岡の日下家に生まれ、京都で修学ののち儒医山本貞徳の養子となった。山本家と越中の関わりはここから始まる。天明４年（1784）に、越中高岡から医学を学ぶ佐渡養益を塾生に受け入れたのが学塾の読書室の始まりとされる。

（2）現在は他の読書室所蔵資料と共に京都府立京都学・歴彩館に寄託されている。正橋剛二解説『山本渓山 入越日記 能登・越中・立山に薬草を求めて』（桂書房、2017）に全文の訓読と注釈、及び全文の写真がある。

（3）小野蘭山『衆芳軒随筆』（国立国会図書館蔵）には、当初は「加越」とあった部分を墨で消して「白立」と推敲した跡が残る。「白立ノ両岳」が白山と立山を指し、これが蘭山の立山登山を示すと考えられる部分である。但し、日記など立山、白山への登山の日時や内容を記すものはなく、『衆芳軒随筆』も晩年の回想で書かれていることから、立山登山自体を疑問視する説もある。

（4）北村四郎「『本草写生図譜』第一期 植物編概説」（上野益三・北村四郎監修『山本渓愚筆／読書室所蔵本草写生図譜①花卉・薬草１』、雄渾社、1981）参照。ここで製作された図譜は、元々渓愚が、伊勢の本草家で亡羊に師事した豪商西村広休の求めで描いて譲渡したもので、これには山本家への金銭的な援助の意味もあった。明治20年に西村が死去し家が没落した後、他へ渡った。このような経緯から、『図譜』は明治20年までに作られたと考えられる。昭和６年（1931）に渓愚の子山本規矩三が買い戻して読書室の所有となり、現在は他の読書室資料とともに寄託されている。

（5）北村四郎「前掲論考」参照。渓愚の腊葉標本について、北村氏が前ご当主山本元夫氏（渓山孫）から聞いた話では、標

本は現存せず害虫で失われたしまったものという。松田清氏の整理・調査以前には、山本家でもこの腊葉の現存を確認しておられなかったようである。

（６）松田清編『山本読書室資料仮目録－統合電子版－』（「http://matsudakiyoshi.com/dokusho.pdf」、 2014）

（７）『依蘭苔／立山所採 渓愚識』（「仮目録」分類番号Ⅲ 器物・標本類 106）、『コホルタケ／立山所手採』（同 107）、『嘉永辛亥七月越中立山採薬之日所得葉腊三十品／山本章夫蔵 立山採薬葉腊目録（２枚）入』（同 164）

（８）『入越日記』、『本草動植物写生図譜』は、ともに読書室では土蔵ではなく以前から母屋に別置されていたもので、松田氏が新たに調査された土蔵内にあった新出の資料ではない。立山博物館では、平成11年度特別企画展「立山に奇草を求めて　－富山藩薬品会を通して－」展で、その両方を借用して展示した。

（９）巻之三「黄連」の記述の中に「△今マ日本出ル二加州ヨリ一者ノ撃テ有リレ声ヘ　心深黄ニシテ実ナリ二勝レリ異国ニ一出ル二羽州ノ庄内ヨリ一者ノ亦タ次クレ之ニ」とある。いわゆる「加賀黄連」として、長くその高い品質が広く知られていたものだが、時期的にも早くから知られていたことが裏付けられる記述であろう。

⑽ 大場秀章『江戸の植物学』（東京大学出版会、1997）152～154頁「ヨーロッパでの園芸趣味の台頭」参照。

⑾ この他に、国立科学博物館の植物研究部が約1400点の飯沼慾斎作製腊葉を所蔵するが、非公開。飯沼慾斎は蘭山に本草学を学んでいるので、学問的なつながりを持っている。

⑿ 白井光太郎「蘭山先生村松標左衛門氏に与ふる書牘十三通の写し」（『白井光太郎著作集第Ⅰ巻 本草学・本草学史研究』科学書院、昭和 60）356～361頁参照。

⒀ 平野満「小野蘭山の本草学と衆芳軒における門人指導」（小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『小野蘭山』八坂書房、2010）の註（12）に、標左衛門は蘭山の没後には、蘭山の門人だった山本亡羊にも教えを受けていたので、現存する腊葉帖に残る朱書きが蘭山のものと確証はないことを指摘している。亡羊も蘭山の学統を承け、その子弟への指導に当たって腊葉の同定に添削を行っていた可能性と、読書室でも腊葉の製作やその利用にも、蘭山の影響が見られたことが示唆される。

⒁ 裏表紙の内側に白井の自筆で「赭鞭帖三局者 文化十癸酉年長塩某所製ニシテ 明治三十六年三月 予之ヲ書肆朝倉屋ニ購求スル所ナリ」とある。

⒂ サンクト・ペテルブルグ市のコマロフ植物研究所から、交換標本として1963年に牧野標本館に送られた「シーボルトコレクション」の中に含まれるもの。「牧野標本館シーボルトコレクション データベース」はウェブ上で公開され、閲覧が可能。

⒃「牧野標本館シーボルトコレクション データベース」に挙げられた腊葉は「アジサイ属の一種」、「アリアケスミレ」、「イヌヨモギ 」、「カワミドリ」、「キャベツ」、「クサボタン」、「ゴマナ」、「コンギク」、「シロヨモギ」、「ナツトウダイ」、「ナルコユリ」、「ハルニレ」、「ヒメハッカ」、「ミソガワソウ」、「ロウバイ」の15点で、製作した小野蘭山のイニシャルとみられる「O.L.」の文字が入っているもの。加藤僖重「牧野標本館にある蘭山の標本」（小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『前掲書』）では牧野標本館所蔵のものは、データベースのうち「アジサイ属の一種」、「シロヨモギ」、「ミソガワソウ」を除き「子ヅミグサ」を加えた13点とともに、「O.L.」と書かれたオランダ国立植物学標本館ライデン分館所蔵の４点（「アワブキ」、「オオケダテ」、「ハマナス」、「ゴモジュ」）合計17点が紹介されている。

⒄ 上野益三「畔田翠山がつくった腊葉帖」（『博物学史論集』八坂書房、1984）参照。論考と69冊の仕様をまとめた表がある。上野益三氏はこの腊葉標本について、翠山が大型の台紙に全草を貼付して作製する近代植物学の視点を持っていた点、翠山の著述の基礎資料となった点、また地理的まとめてあることで著述内 容と採集地の植物相が対照できる点で、翠山の研究を実物資料で追跡できる一次資料として、また当時の植物学のレベルを検証する資料として貴重である点を指摘している。

⒅ 立山で採集された腊葉は「立山 草」（13枚）、「立山 木」（６枚）の19枚が現存する。『立山草木志』に墨絵が載る18点のうちフスゲ（エビラフジ）、立山姫トラノオ（ツマトリソウ）、立山タガラシ（ヤマガラシ）、細辛（カンアオイ）、水芭蕉、山カシユウ、願菖蒲（キンコウカ）、馬先蒿（シオガマギクの類）、ツクバ子サウ、立山山ス、立山ワタ（ワタスゲ）、立山ホタル袋（イワギキョウ）、立山龍膽（トウヤクリンドウ）、アラレギク（タカネウスユキソウ）、ハナヒリノ木、山ナシ（アズキナシ）の16点が腊葉と一致する。墨絵にはあって腊葉がないものは「竹米」、「立山ツカサクラ」の２点。※（　）内は腊葉からの同定植物（同定は、元大阪市立自然史博物館学芸員藤井伸二氏による）

⒆ 蘭山の学統形成に関わる具体的な人間関係、本草研究の諸活動を時間軸で見た蘭山の採薬行、採薬記の作成、門人らとの関わりの記録、及びその出典資料については、磯野直秀「小野蘭山年譜」（『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』第46号、2009）71～94頁参照。また、平野「前掲論文」には、蘭山の書信による指導として、門人が腊葉などの資料を送り、

その鑑定を受けるやり方が行われており、鑑定のためには謝金が必要であったこと、そのような鑑定に供された腊葉とみられる「押葉草木帖」（小野蘭山審定）２冊は武田科学振興財団杏雨書屋に所蔵されている（杏 4765）ことが紹介されている。

(20) 白井光太郎『前掲書』所収の村松標左衛門に宛てた享和３年６月27日付書簡には、蘭山の採薬を重視する姿勢がわかるものとして、「本艸学急務は採薬宜候」との言葉がある。遠藤正治「小野蘭山学統の本草学と洋学」（小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『前掲書』）参照。

(21) 蘭山は、高齢にも拘わらず江戸出府後には６回の採薬行を行い、それぞれに採薬記を著している。
　享和元年には幕命により常陸、野州で採薬し『常野採薬記』を、甲斐、駿河、伊豆、箱根で採薬し、『甲駿豆採薬記』を著す。享和２年には幕命により紀州で採薬、『紀州採薬記』を著す。享和３年幕命により房州、総州、常陸で採薬を行い、『房総常州採薬記』を著す。文化元年幕命により伊勢、嶋で採薬を行い、『駿州勢州採薬記』を著す。文化２年幕命により上州、武州で採薬を行い『上州妙義山并武州三峯山採薬記』を著す。

(22) 松田清『京の学塾 山本読書室の世界』（京都新聞出版センター、2019）69頁には、文政10年に水谷豊文から山本亡羊宛に書かれた書簡の一部が紹介されている。３月15日に伊藤圭介が開いた本草会の報告、９月15日に大河内存真が開く本草会への出品依頼、前年（文政９年）にオランダ人（尾張で面会したシーボルトかー松田氏）からインド（オランダ領東インドー松田氏）産草木腊葉を貰い、それが奇品ばかりであったとの件が紹介されている。物産会、腊葉を介した知識や情報の交流が、蘭山の門人同士でも行われていたことがわかる。

(23) 大場『前掲書』206～207頁参照。伊藤圭介や水谷豊文、宇田川榕菴が作製した標本は、植物を覚えるための手控えであり、標本によって自分の観察に客観性を保障する考え方に欠如していたと指摘する。

(24)『入越日記』には「路尚険隘 此日陰雨一山皆泥濘 余失足 転倒仆者不知其幾度 幸無所傷 只趾爪脱二耳若下峻坂最為可懼」としている。

(25) 松田『前掲書』32頁には、山本読書室資料の中にある「入越日記草稿　章夫」の紹介がある。

(26) 遠藤正治編『読書室200年史』（山本元夫、1981）「Ⅳ幕末維新の読書室」参照。

(27) 遠藤『前掲書』20頁「第７表　海紅亭物産会一覧」に紹介されている。その元になった資料『海紅亭物産会目録第一冊』は西尾市岩瀬文庫が所蔵する。

(28) 遠藤『前掲書』24頁「第８表　聚芳社本草会一覧」に紹介されている。その元になった資料『聚芳社出品目録』は京都府立京都学・歴彩館寄託の読書室資料の中に含まれているが、これも未調査である。

(29) アイスランドモス（Iceland moss）の音訳。北海道～四国の高山の地上に生ずる地衣類。薬用にされた。

(30) 読書室物産会の目録の中には、文政３年、天保６年の物産会で読書室所蔵の越中・立山採集の石類が多数出展されている事例、また天保７年には立山産「御前タチバナ」、越中産の「盆栽川黄薛」の出品がある。前者の写生画は『写生図譜』の中にある。これは渓山が立山で採集を行ったよりも以前から読書室にあった腊葉を写生したことがわかる事例である。後者は「盆栽」とあるので採薬からではなく、花戸などから鑑賞用のものを入手したと見られる。

(31) チングルマの写生画は、綿毛になったもの１つと、花弁のついたものが２つ、合計３つが描かれている（写真55）が、花弁のついたものは、同じ腊葉を裏返して２つに描いたものである。これは腊葉の形状と一致しており、写生の際には、花弁の付いた腊葉（写真53）を裏返して描いたと見て間違いない。もう一方の腊葉（写真51）は写生画には描かれていない。

(32) 西尾市立岩瀬文庫が所蔵する『万花帖』24巻（資料番号：卯－ 13）は、渓山が弟の正夫と描いた絵図約1270点が収められているが、同文庫の古典籍書誌データベースでは、20巻には「キクブキ〈一名クロクモサウ　已上係立山所獲渓山画〉」と記載のあることが紹介されている。キクブキは、「立山関連腊葉」にもあり、また『写生図譜』にも写生画がある。この資料については、今後『写生図譜』との関連についての詳しい調査が必要だが、署名が「渓愚」ではなく「渓山」になっている点から、採集から早い内に描かれたものとわかる。

(33) 註釈（４）参照。

(34) 北村「前掲論考」参照。読書室が主宰した物産会への出品で持ち込まれたものを写生する外、大坂や名古屋の物産会へも足を運び、写生したことがあったようである。前者では『文久壬戌読書室物産会目録』に、花戸解毒斎が「守宮槐」とともに「立山小葉玫瑰　開花者」を出品している事例がある。松田『前掲書』107頁に依ると、解毒斎は上賀茂社家の一つ岡本家の出身で薬草採取をしており、草木鳥獣に詳しい者とある。単に生花を商うのではなく、プラントハンターのような存在だったと思われるが詳細は未詳である。物産会には、他にも花戸からの出品があり、本草家は様々な立場の植物に詳しい者との接触があったことが窺われる。

(35) この植物名表記は『入越日記』による。それぞれ『立山草木志』では、「立山チングルマ」は「一種白頭翁　児ノ舞」。「立山ツガマツ」は「立山ツカサクラ」とあるがスケッチは別の植物になっている。「葱管黎蘆（シユロサウ）」は「葱管黎蘆」とするが「日光ラン」と解釈している。「蒜黎蘆（バイケイサウ）」は同一。「粘魚鬚（ヤマカシウ）」は「山カシユウ」、「立山未詳（C）」は渓山の腊葉の同定から「エゾシオガマ」とし、腊葉の同定とスケッチから「馬先蒿」。「観音蓮（ミヅバセウ）」は、「水芭蕉」。「蛍袋」は「立山ホタル袋」。「五鬣松」は「五鬣松」として禅定松と解釈しているがハイマツを指すと見られる。

(36)「峯針 一名恩能礼」は『立山草木志』には記載がないが、腊葉帖「立山 木」にミヤマハンノキがある。渓山の腊葉には「立山／ヲンノオレノ木／一名 大バミ子バリ」とあり「ミヤマハンノキ」に同定されるものである。翠山腊葉帖「立山　木」にミヤマハンノキの腊葉がある。また、「立山未詳（C）」と「立山 草」にある「黄花馬先蒿」の腊葉は、ともにエゾシオガマに同定されるものである。

(37) 正橋剛二「各地医学塾入門帳中の越中人」（『近代史研究』第十八号、1995）13頁参照

(38) 拙稿「幕末期の「物産会」に見る物と人の交流―京都・大坂の「物産会」に出展された越中・立山の採集品から」『富山県 [立山博物館] 研究紀要』第８号、2001）73～76頁参照。正橋剛二「『方意便蒙』高岡長崎家収蔵の神農講の記録」（『医譚』第六四号、1993）９～11頁参照。

表１「「立山関連腊葉」『写生図譜』『日記』関係一覧」

（１）腊葉が現存するもの

整理番号	立山関連腊葉	腊葉の添え書き	『写生図譜』	『日記』（　）内は採集地	同定植物名	腊葉包寸法（cm）	備　考	相関区分
1	立山イチマツサウ	俗称			ミヤマアケボノソウか？	11.8 × 17	立山産でないものの混入の可能性あり	G
2	立山ヲンノレノ木	一名大バミ子バリ 岩崎氏写生ニ見タリ	ヲンノレ 一名大ハミ子バリ	峯針　一名恩能礼	ミヤマハンノキ	12.5 × 17.5	畔田翠山作製腊葉にあり	B
3	立山タウチサウ			田内草	ツバメオモト	13 × 18		F
4	立山産ウツボグサ	俗称			イワイチョウか？	12 × 18.5		G
5	立山覆盆子ノ類	大葉耨田蔗トイヘキモノカ	未詳　④	覆盆子一種（一谷）	ベニバナイチゴ	13.3 × 17.3		B
6	立山未詳（A）	山苦賈一種	未詳　②		クロトウヒレン	12.4 × 17.3		D
7	立山三葉黄連		三葉黄連	三葉黄連（桑谷）	ミツバオウレン	12.6 × 18.5	安政2年（1855）読書室物産会に出品	B
8	立山五葉イチゴ		五葉イチゴ	五葉苺	ヒメゴヨウイチゴか	12.8 × 18.5		B
9	立山マメナ	一名イハイテウ	マメナ一名岩イテウ	豆菜一名岩一様、（弥陀ヶ原）	イワイチョウ	11.8 × 16		B
10	立山ハリブキ		ハリブキ	刺款冬（二谷　姥懐）	ハリブキ	14.2 × 19.2		B
11	立山ハリブキ		同（ハリブキ）一種	刺款冬（二谷　姥懐）	ハリブキ	13.5 × 16.6		B
12	立山モミヂカラマツ		紅葉カラマツ	楓唐松（二谷、姥懐）	モミジカエデ	10.2 × 20.5		B
13	立山ウサギギク		ウサギ菊		ウサギギク	11.6 × 18.9		D
14	立山マナギサウ	即ヲンタデ	マナギサウ 一名オンタデ	御蓼（室堂）	ウラジロタデ	12.5 × 18		B
15	立山細葉七カマド				ナナカマド	12 × 18.8		G
16	立山白山ギキャウ		岩ギキャウ 一名白山ギキヤウ	白山桔梗一名岩桔梗（御前）	ミヤマリンドウ	6 × 18		B
17	立山タケカンバ			嶽樺	ダケカンバ	7.2 × 15.6		F
18	立山キクブキ	一名クロクモサウ	キクブキ		クロクモソウ	12 × 18.4		D
19	立山チングルマ	一名チゴノマヒ	チングルマ 一名チゴノマイ	珍車　一名児舞（弥陀ヶ原）	チングルマ	12 × 18.5	『立山草木志』にもあり	B
20	立山ツガマツ	一名ツガザクラ	ツガザクラ 一名ツガマツ	通賀松　一名通賀桜（室堂）	アオノツガザクラ	11.8 × 17.2	『立山草木志』にもあり	B
21	立山ツガマツ一種	黄花者	黄花ツガマツ	黄花通賀松（室堂）	ツガザクラ	12.3 × 17		B
22	立山未詳小木（B）	ウスノキニ類シテ葉ニ淡彩色ヲ帯ブ	未詳　⑤		クロマメノキ	6 × 16.8		D
23	立山未詳（C）		未詳　③		エゾシオガマ	6.8 × 17.6	畔田翠山作製腊葉にもあり	D
24	立山未詳（D）	龍膽一種細小ナルモノ	未詳　①	立山龍膽（御前）	タテヤマリンドウ	6.5 × 17.2		B
25	御前タチバナ		御前タチバナ	御前橘（桑谷）	ゴゼンタチバナ	12.5 × 18		B
26	立山岩キンバイ		岩キンバイ	岩金梅（室堂）	ミヤマキンバイ	13.2 × 19		B
27	立山銀梅サウ		銀梅サウ		ハクサンイチゲ	11.8 × 16		D
28	立山舞鶴サウ	一名白山アフヒ		舞鶴草	マイヅルソウ	6.8 × 19		F
29	立山コケモゝ	一名ハマナシ		苔桃（獅子鼻）	コケモモ	6.3 × 16.2		F
30	立山金梅サウ		金梅サウ	金梅草（御前）	ミヤマダイコンソウ	11.2 × 18.2		B
31	立山チングルマ	一名チゴノマイ 岩崎写生ニ見タリ	チングルマ 一名チゴノマイ ※腊葉19の写生に同じ	珍車　一名児舞（弥陀ヶ原） ※腊葉19の記載に同じ	チングルマ	12.8 × 16.5	『立山草木志』にもあり	B
101	立山所手採依蘭苔	渓愚識		衛須蘭土勢茂須（浄土山）	エイランタイ	6 × 10	箱とは別に保存	F
102	立山所手採コホルタケ	即樹衣一種		凍蕈（浄土山）	ミヤマハナゴケ	6 × 11	箱とは別に保存	F

（２）腊葉はないが『日記』に記載があるもの

『日記』（　）内は採集地	備　考	相関区分
鬼臼サンカヨウ（姥懐）		E
蛩休キヌカサソウ（姥懐）		E
大葉石菖（弥陀ヶ原）		E
金光花（弥陀ヶ原）		E
菊款冬（二谷）		E
葱管黎蘆シユロサウ	『立山草木志』にあり	E
蒜黎蘆バイケイサウ	『立山草木志』にあり	E
唐松草（一谷）		E
白花地楡		E
白花龍膽（御前）		E
鹿子草　一名草下毛（二谷）		E
粘魚鬚ヤマカシウ	『立山草木志』にあり 畔田翠山作製腊葉にあり	E
雪笹		E
大雪笹		E
鬼燈檠		E
観音蓮ミヅバセウ	『立山草木志』にあり 畔田翠山作製腊葉にあり	E
臼木一種		E
猿猴草（泉）	本文中に記載のもの	E
紅花（芦峅）	本文中に記載のもの	E
蛍袋（芦峅）	本文中に記載のもの	E
甘遂（芦峅）	本文中に記載のもの	E
山蓼（芦峅）	本文中に記載のもの	E
本鉤吻（芦峅）	本文中に記載のもの	E
般之木（芦峅）	本文中に記載のもの	E
斑葉鶏腿児（芦峅）	本文中に記載のもの	E
五鬣松（三山）	本文中に記載のもの	E

（３）腊葉はないが『写生図譜』に写生画があるもの

『写生図譜』	備　考	相関区分
紺レン	キクザキイチゲ*	C
立山玫瑰	「立山玫瑰」は安政２年、文久２年読書室物産会に出品 タカネイバラ*	C
カモメラン		C
立山フグリ	「立山フグリ」は安政２年 読書室物産会に出品 ミヤマクワガタ*	C
ルリハコベ		C
立山産／胡黄連ト云者／即狐ノ尾一種	ネバリノギラン*	C
立山産／細葉石松	「立山産」細葉石松」は安政２年（1855）読書室物産会に出品 イワヒバ*	C
釵子股	ボウラン*	C

＊＝北村四郎の同定による

凡例

・整理番号は、調査の際に箱に腊葉が保存されている順（調査順）に便宜的に付けたもので、添付されていた目録の順とは一致していない。また、箱にまとめられていない２点は区別のため 100 番台（101、102）の整理番号を付けて加えた。

・「腊葉に書かれた名称」欄で「未詳」と書かれた複数の資料名については調査順を元に便宜的に（A）～（C）と付けたもので、掲載した写真の名称と番号に一致している。

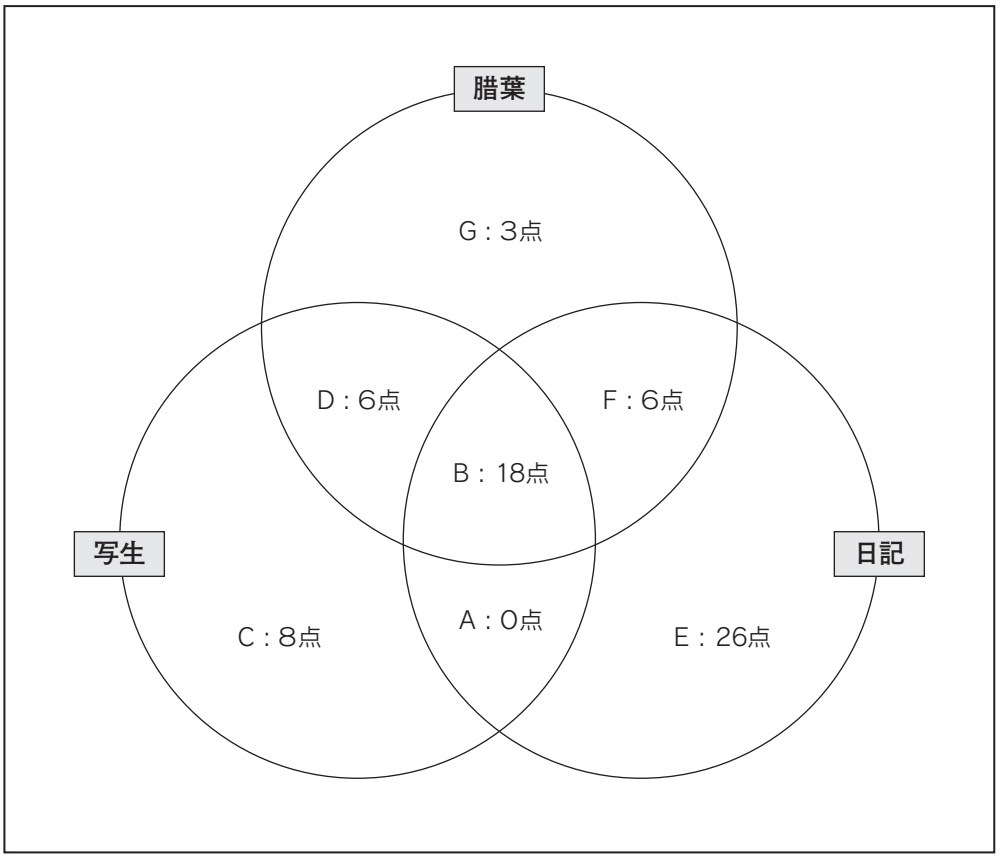
・「本草写生図譜 立山採薬の名称」欄で「未詳」と書かれた複数の資料名については折帖の掲載順を元に便宜的に①～⑤と付けたもので、掲載した写真の名称と番号に一致する。

・整理番号 19、31 の「立山チングルマ」は、それぞれ違う個体の腊葉だが便宜上２カ所に入っている。『写生図譜』の「チゴノマイ」と『日記』の「珍車」は、表では便宜的に重複して記入してある。

・腊葉の同定は、日本海植物研究所長佐藤卓氏による。

・相関区分の A ～ F は、表２に示した区分による。

図１「相関関係図」



『腊葉』＝「立山関連腊葉」33 点※1、「写生」＝「本草写生図譜 花卉三」に写生画がある31点（32 点）※2、
『日記』＝「入越日記」で、立山山域で採集した記載がある49点（50点）※3を示す。

※１　腊葉標本数が33点とあるのは「嘉永辛亥七月越中立山採薬之日所得腊葉三十品」の31点に、「立山所手採コホルタケ」「立山所手採依蘭苔」を加えた点数である。

※２　「ハリブキ」、「チングルマ」の腊葉はそれぞれ２点ずつあり、腊葉にされた植物の種類としては30種になる。但し「ハリブキ」腊葉の２点はそれぞれ微妙に形状が違うため、『図譜』では２つは別々に描かれている。記載の実数31点に対して「チングルマ」は２点をまとめて１つに描いてある。そのため相関図の中では、腊葉標本の数に対応させるため「チングルマ」の図を重複させて32点と集計してある。

※３　『日記』でも「チングルマ」は１種として記載されているので、記載の実数49点に対して同様に重複させて50点と集計してある。

表２「相関関係の内訳」

分類	図譜	日記	腊葉	資料数
A	あり	あり	なし	0
B	あり	あり	あり	18
C	あり	なし	なし	8
D	あり	なし	あり	6
E	なし	あり	なし	26
F	なし	あり	あり	6
G	なし	なし	あり	3

「立山関連腊葉」、『図譜』

資料はすべて京都府立京都学・歴彩館寄託。資料名の前の数字は、表１の整理番号を示す。

写真１　箱／蓋

写真２　箱／側面

写真３　１立山 イチマツサウ 包み紙

写真４　１立山 イチマツサウ

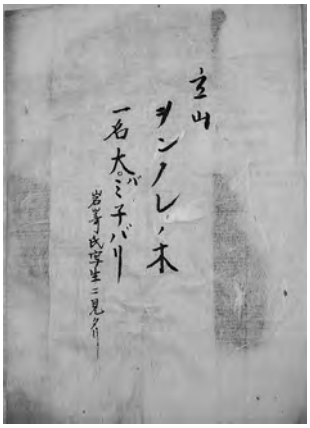


写真５　２立山 ヲンノレノ木 包み紙

写真６　２立山ヲンノレノ木

写真７　２ヲンノレ／一名大バミ子バリ（図譜）

写真８　３立山 タウチサウ 包み紙

写真９　３立山タウチサウ

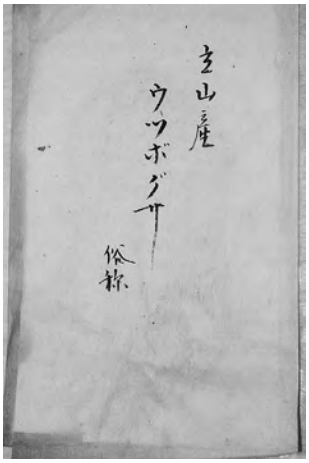


写真10　４立山産 ウツボグサ 包み紙

写真11　4 立山産 ウツボグサ

写真12　5 立山 覆盆子ノ類 包み紙

写真13　5 立山 覆盆子ノ類

写真14　5 未詳④（図譜）

写真15　6 立山 未詳／山苦賈一種 包み紙

写真16　6 立山未詳／山苦賈一種

写真17　6 未詳②（図譜）

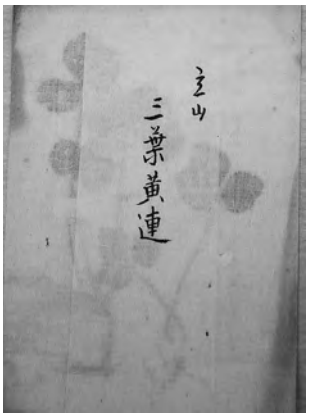


写真18　7 立山 三葉黄連 包み紙

写真19　7 立山 三葉黄連

写真20　7 三葉黄連（図譜）

写真21　8 立山 五葉イチゴ 包み紙

写真22　8 立山 五葉イチゴ

写真23　8 五葉イチゴ（図譜）

写真24　9 立山マメナ／一名イハイテウ 包み紙

写真25　9 立山 マメナ／一名イハイテウ

写真26　9 マメナ／一名岩イテウ（図譜）

写真27　10 立山 ハリブキ 包み紙

写真28　10 立山 ハリブキ

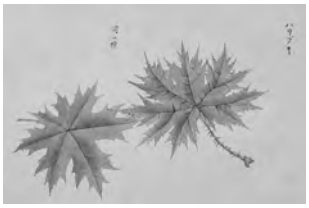


写真29　10,11 ハリブキ／同一種（図譜）

写真30　11 立山ハリブキ 包み紙

写真31　11 立山 ハリブキ

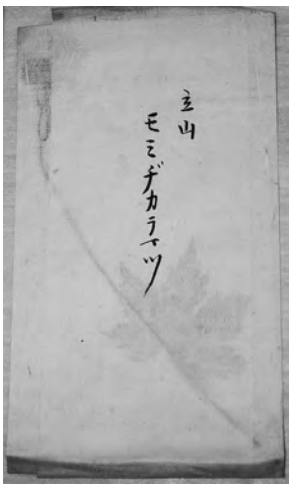


写真32　12 立山 モミヂカラマツ 包み紙

写真33　12 立山 モミヂカラマツ

写真34　12 紅葉カラマツ（図譜）

写真35　13 立山ウサギギク 包み紙

写真36　13 立山ウサギギク

写真37　13 ウサギ菊（図）

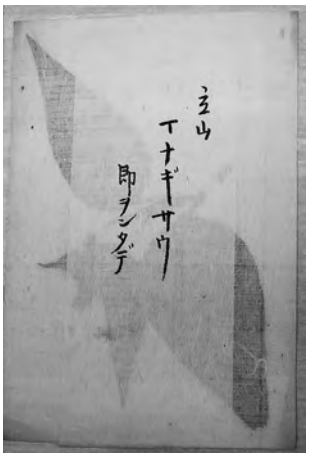


写真38　14 立山マナギサウ即ヲンタデ 包み紙

写真39　14 立山 マナギサウ即ヲンタデ

写真40　14 マナギサウ一名オンタデ（図譜）

写真41　15 立山細葉七カマド 包み紙

写真42　15 立山細葉七カマド

写真43　16 立山 白山ギキャウ 包み紙

写真44　16 立山白山ギキャウ

写真45　16 岩ギキャウ　一名白山ギキヤウ（図譜）

写真46　17 立山 タケカンバ 包み紙

写真47　17 立山 タケカンバ

写真48　18 立山 キクブキ／一名クロクモサウ 包み紙

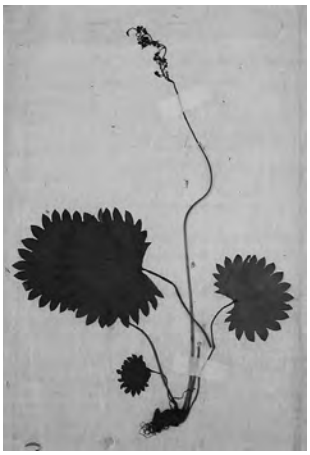


写真49　18 立山キクブキ／一名クロクモサウ

写真50　18 キクブキ（図譜）

写真51　19 立山チングルマ／イチメイチゴノマヒ 包み紙

写真52　19 立山チングルマ／イチメイチゴノマヒ

写真53　31 立山チングルマ／一名チゴノマイ／岩崎写生ニ見タリ 包み紙

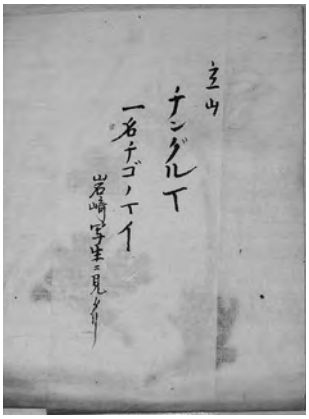


写真54　31 立山チングルマ／一名チゴノマイ／岩崎写生ニ見タリ

写真55　31 チングルマ　一名チゴノマイ（図譜）

写真56　20 立山ツガマツ／一名ツガザクラ 包み紙

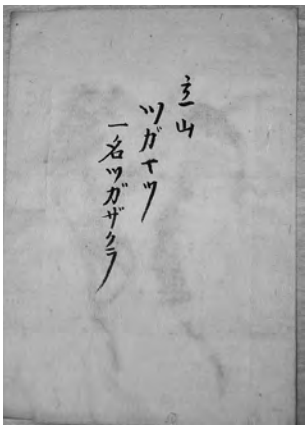


写真57　20 立山 ツガマツ／一名ツガザクラ

写真58　20 ツガザクラ　一名ツガマツ（図譜）

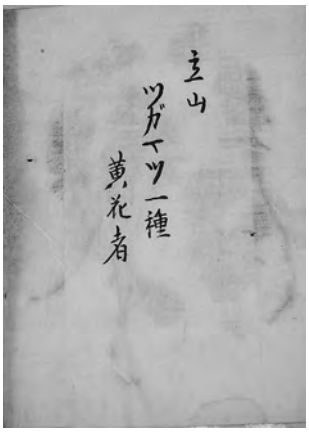


写真59　21 立山 ツガマツ一種／黄花者 包み紙

写真60　21 立山 ツガマツ一種／黄花者

写真61　21 黄花ツガマツ（図譜）

写真62　22 立山 未詳(B)小木／ウスノキニ類シテ葉ニ淡彩色ヲ帯ブ 包み紙

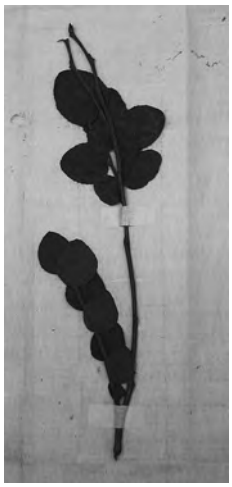


写真63　22 立山 未詳(B)小木／ウスノキニ類シテ葉ニ淡彩色ヲ帯ブ

写真64　22 未詳⑤（図譜）

写真65　23 立山 未詳(C) 包み紙

写真66　23 立山 未詳(C)

写真67　23 未詳③（図譜）

写真68　24 立山未詳／龍胆一種細小ナルモノ

写真69　24 未詳①（図譜）

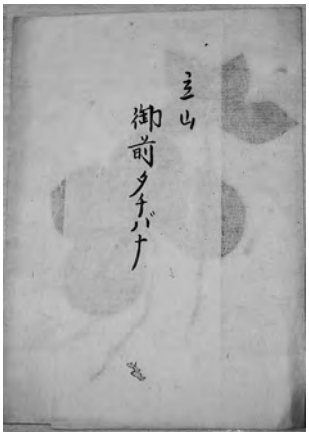


写真70　25 立山 御前タチバナ包み紙

写真71　25 立山 御前タチバナ

写真72　25 御前タチバナ（図譜）

写真73　26 立山 岩キンバイ 包み紙

写真74　26 立山 岩キンバイ

写真75　26 岩キンバイ(図譜)

写真76　27 立山 銀梅サウ 包み紙

写真77　27 立山 銀梅サウ

写真78　27 銀梅サウ（図譜）

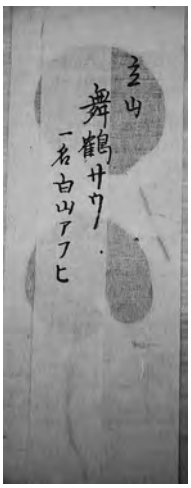


写真79　28 立山 舞鶴サウ／一名白山アフヒ 包み紙

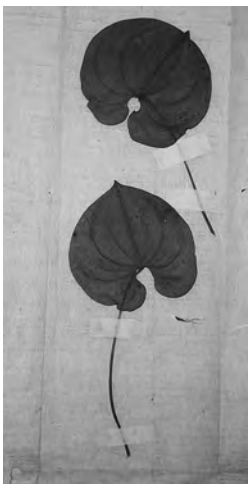


写真80　28 立山 舞鶴サウ／一名白山アフヒ

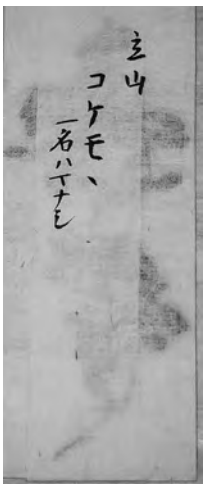


写真81　29 立山 コケモヽ／一名ハマナシ　包み紙

写真82　29 立山 コケモヽ／一名ハマナシ

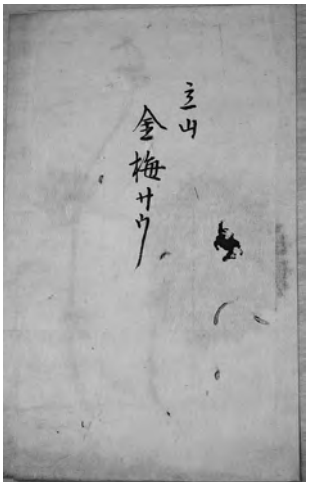


写真83　30 立山 金梅サウ 包み紙

写真84　30 立山 金梅サウ

写真85　30 金梅サウ（図譜）

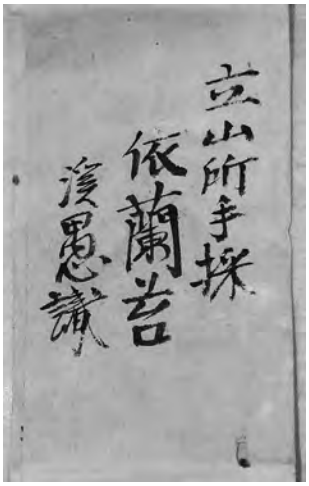


写真86　101 立山所手採依蘭苔／渓愚識 包み紙

写真87　101 立山所手採依蘭苔／渓愚識

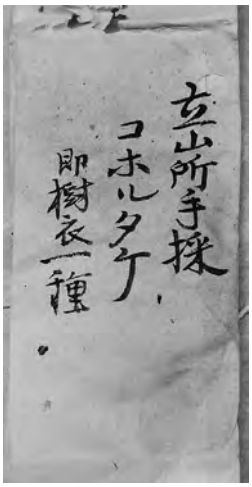


写真88　102 立山所手採コホルタケ／即樹衣一種 包み紙

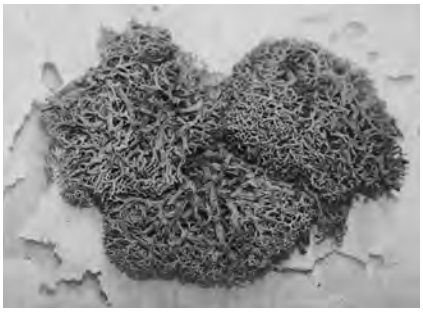


写真89　102 立山所手採コホルタケ／即樹衣一種